

「会員の皆さま方へ」

会長 石澤 伸弘 (北海道教育大学札幌校)



日頃より学会活動にご理解とご協力を賜りまして感謝申し上げます。

今年度の学会大会の第 64 回大会が 11 月 29 日 (土)・11 月 30 日 (日) に北翔大学にて開催されました。2 日目には、「体育という言葉をめぐる社会の変化と学会の役割」とのタイトルでシンポジウムが開催され、

日本体育・スポーツ・健康学会会長で中京大学の来田享子先生、そして、北翔大学の川西正志先生と共に登壇し、一端を担わせていただきました。ご参加いただいた会員の皆さま方には感謝申し上げます。

昨今、「体育」と「スポーツ」の関連性が取り沙汰されています。ポイントとしては、教育の範疇に位置づく「体育」や「体育学」という名辞には限界があり、「スポーツ」との差違や関連性について議論の必要が出てきたことと認識しております。そして更には、本学会のアイデン

ティティ (社会的存在目的) は、スポーツや身体活動を通じた“望ましい社会”への貢献であり、そのために会員の研究とその交流を喚起・促進し、研究成果を統合する、ということも理解しております。

本学会の名称につきましては、もう少し議論を重ね、その是非について検討を重ねて参ります。

さて、年度も押し迫って参りましたが、北翔大学がホストとなる日本体育・スポーツ・健康学会第 76 回大会 (8 月 31 日～9 月 2 日)の準備も本格化して参りました。本学会のオペレーションと並行して準備をなされている永谷理事長と大宮先生、そして、畝中先生と浅野先生、本当にお疲れさまです。本学会としても側面からバックアップして参ります。

そして、会員の皆さま方へのお願いです。1 人でも多くの会員が日頃の研究成果を北翔大学での学会で発表していただきたいです！北海道の体育・スポーツの知見の深さを全国に見せつけてやりましょう！(笑)

「日本体育・スポーツ・健康学会第 76 回大会の開催にあたって」

理事長 永谷 稔 (北翔大学)



今年度は、本学会大会令和 7 年度第 64 回大会を北翔大学にて 11 月 29・30 日開催いたしました。大会委員、実行委員並びに北翔大学の教職員、学生諸君のご協力もあり、無事盛会に終えることができました。誠に感謝申し上げます。ありがとうございました。

そして、来年度は、2026 (令和 8) 年 8 月 31 日から 9 月 2 日に「日本体育・スポーツ・健康学会第 76 回大会」を北翔大学および札幌コンベンションセンターにて開催することとなります。大会テーマやシンポジウムの大枠

は固まり、いよいよ開催に向けた具体的な準備が進められていくこととなります。北海道体育学会の皆様にもエントリーや発表はもちろんのこと、大会運営でさまざまなご協力を賜らなければなりません。

会員数は約 6 千人と、体育・スポーツ系最大の学会であり、来場予想では 3 千人に及ぶとも言われています。これまで著名で有数な大規模大学で実施されることが多かった学会大会ですが、北海道の小規模大学においても皆様のチカラを結集し、全国や世界に発揮、アピールする場になれば幸いです。何卒よろしくごお願い申し上げます。

令和7年度第64回北海道体育学会大会 傍聴記

■ 口頭発表

大会では、口頭発表が若手研究セッション 15 演題、一般発表が 7 演題の合計 22 演題が発表された。

大会 1 日目の口頭発表は、若手研究セッションと一般発表が行われた。口頭発表は、競技の理解や動作が上達するための前段階の動作からのアプローチ、競技能力向上のための研究、競技実施のための意識や感覚の調査、科目間を結びつける教育方法の検討など様々な視点から多くの研究発表を聴講することができた。若手研究者賞を受賞した吉本香乃先生（酪農学園大学大学院）は、運動 30 分前以降の糖質飲料の分割摂取から運動誘発性低血糖への検討を行っており、運動現場への還元性が高い研究が報告された。口頭発表では、若手研究者の研究発表が多く、質疑においても検定方法や検定力など統計解析から得られた結果に対しての多角的な評価について、建設的かつ基礎的な質疑が多くみられた。本大会の若手研究セッションでは、研究者として求められる基礎的な学びと成長の糧となる経験を積むことができる貴重な機

■ ポスター発表&シンポジウム

本大会では、8 題のポスター発表による研究成果が共有された。清野宏樹先生（桃山学園大学）は、体育授業における「楽しさ」の本質とその概念が形骸化しつつある現状を論じられた。水嶋星陽先生（北海道教育大学大学院付属旭川中学校）らは、中学校保健体育科「体育理論」の単元まるごと構想に基づく授業実践を報告し、学習効果や課題を示された。林裕輔先生（北海道教育大学大学院付属旭川小学校）らは、小学校低学年「宝運び鬼」の授業実践から、学習活動の意義について考察された。阿部卓哉先生（北翔大学学部生）らは、北海道内における大学野球連盟の組織改革過程について報告された。小松敏彦先生（心・體・智研究所）は、肉眼解剖学的手法での下肢帯外旋 6 筋の形態学的特徴を明らかにして、運動学やトレーニング科学への応用可能性を示唆された。鈴木沙弥先生（北翔大学学部生）らは、幼児の「走って遠くへ跳ぶ」能力を観察的動作評価法を用いて分析し、その活用の可能性について示された。また、木戸すず先生（北翔大学学部生）らは、同様の評価法により幼児の

東郷 将成（旭川市立大学短期大学部）

会であるため、今後も多くの演題が発表されることが望まれる。

大会 2 日目の一般演題では、運動会の意義の再検討や子どもたちの学びが深まるための学習計画、部活動の負担を様々な視点から解析した研究などが発表された。大会両日を通して、口頭発表は緊張感がありながらも活発な議論がしやすい空気感で発表が行われ、いずれの発表においても質疑の時間が足りず、フロアでの議論が必要なほど充実した大会となった。また、大会での発表を拝聴していく中で、私自身が日々行っている教育や研究に還元しうる学びや気付きなどが得られる貴重な時間となった。

次の第 65 回北海道体育学会大会は、札幌国際大学が当番校で令和 8 年 11 月に開催予定である。本大会で得られた知見と熱意を糧に、次の大会でも多くの発表や活発な質疑から新たな学びが生まれるような充実した大会が開催されることを心待ちしております。

安田 純輝（札幌国際大学）

「走って遠くへ跳ぶ」能力の横断的発達の特徴について発表された。そして、福家健宗先生（北海道医療大学）らは、認知機能向上を目的としたグルーヴリズム運動の実践報告をされた。

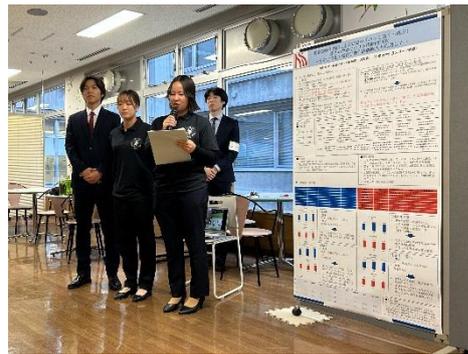
大会 2 日目には、永谷稔先生（北翔大学）を司会、川西正志先生（北翔大学）を指定討論者としたシンポジウム「体育という言葉をめぐる社会の変化と学会の役割」が開催された。シンポジストをされた日本体育・スポーツ・健康学会会長の來田享子先生（中京大学）は、旧称：日本体育学会からの現行学会名への名称変更に至った議論の経緯と今後の方向性を示され、体育の社会的受容の変化について述べられた。同じくシンポジストの北海道体育学会会長の石澤伸弘先生（北海道教育大学札幌校）は、北海道体育学会が親学会と連携し、地域の課題を抽出・検討する役割の重要性を強調するとともに、「体育」という言葉の広義性を再認識し、その価値を社会に発信していく必要性について述べられた。

写真で振り返る学会大会

今年度の学会大会は北翔大学（江別市）で開催されました



ポスター発表の様子



情報交換会も学内で行いました



シンポジウムの様子 (シンポジストとして来田享子先生に Zoom でご参加いただきました)



総会や若手研究者賞授賞式も行われました

学会大会実行委員報告

大会実行委員長 小田 史郎（北翔大学）

令和7年度北海道体育学会第64回大会は、2025年11月29日（土）・30日（日）に北翔大学において開催し、無事終了しました。昨年度の学科大会以降、多くの参加者と演題数を目指して準備を進めてまいりましたが、当日の参加者を含め、100名近い方に参加いただくことができました。当日の運営ではやや皆様にご迷惑をおかけすることがございましたが、大きなトラブルもなく終了することができたことにほっとしております。運営や準備にあられた役員の皆様、学会事務局および参加された方々に厚く御礼申し上げます。

今大会1日目には「北海道体育学会賞」を受賞された北星学園大学の養内豊先生に記念講演をいただき、先生の研究に対する思いや現場と連携した取り組みなど、大変参考になるお話をいただくことができました。この場をお借りいたしまして、先生にお祝いと感謝を申し上げます。また2日目には、日本体育・スポーツ・健康学会会長の来田享子先生にシンポジウムにてご講演いただき、体育という言葉について深く考える機会をいただきました。お忙しい中ご参加いただきましたこと、北海道体育学会に対して温かな励ましの言葉を頂きましたことにも厚く御礼申し上げます。2026年度には、第75回日本体

育・スポーツ・健康学会の学会大会を北海道で（9月1、2日は北翔大会会場で）開催することになります。今回、運営に関わった教員や学生を含め、良い大会にしていきたいとの思いで準備をしておりますので、皆様にもぜひご参加いただけますと幸いです。

北海道体育学会はこれからも「会員でよかったと思えるような居心地の良い学会」「北海道を離れても参加しやすくなる学会」を目指して、地方会ならではの温かい雰囲気活動を続けてまいりますので、今後ともよろしくお願いたします。



大会実行委員と北翔大学の学生スタッフ

次回の学会大会実行委員からの連絡

大会実行委員 小林 秀紹（札幌国際大学）

第64回北海道体育学会は北翔大学で開催されました。参加者数は100名を超え盛況に終わりました。シンポジウムでは日本体育・スポーツ・健康学会会長の来田享子先生（中京大学）にオンラインで、また北海道体育学会会長の石澤伸弘先生（北海道教育大学札幌校）には現地でご講演いただきました。来年度北翔大学で開催される日本体育・スポーツ・健康学会第76回大会のディレクターである川西正志先生（北翔大学）を指定討論者として、大いに盛り上がりました。次年度、第65回北海道体育学会は札幌国際大学（札幌市清田区）において令和8年11月に開催予定です。

札幌国際大学は札幌市清田区にあり、最寄り駅は地下鉄東豊線福住駅で、そこからおよそ3.5kmの道のりです。北海道体育学会の本学での開催は1969年に開学した前身の静修短期大学時代を含めましても初となります。令和8年度はご存じのとおり北翔大学で日本体育・スポーツ・健康学会第76回大会が開催されますが、その余波に乗り、盛況な大会になるよう準備したいと考えます。同大会に参加されるご予定の方々には2カ月後の北海道体育学会でも発表、参加いただきますよう、また会員が増えることも期待しつつ、皆様のご協力をお願いする所存です。

学会賞を受賞して

蓑内 豊（北星学園大学）

このたびは、北海道体育学会賞を賜り、誠にありがとうございます。まずは、これまで共に研究を進めてくださった共同研究者の皆様、ならびに数多くの調査や実践活動にご協力いただいた選手・指導者の皆様に、心より感謝を申し上げます。本賞は、私個人の成果というよりも、研究・実践の場で関わってくださった多くの方々と共にいただいたものと受け止めております。

北海道体育学会賞の受賞基準が学会誌への掲載論文数であることから、本賞は私の研究活動における一つの目標であり、長年にわたる研究継続の大きな励みでもありました。私の論文が初めて「北海道体育学研究」に掲載されたのは1995年であり、それから約30年の歳月を経て、このような形で評価をいただけたことは、研究者としてこの上ない喜びです。本学会誌は、私の研究の歩みを支えてくれた重要な発表の場であり、その意義をあらためて実感しております。

私の専門はスポーツ心理学、とりわけ動機づけに関する研究であり、大学院時代には実験的調査や心理テストを用いた基礎的研究を中心に取り組んできました。しかし、北海道に赴任してからは、競技現場で直面する心理的課題に触れる中で、従来の研究枠組だけでは現場のニーズに十分応えられないと感じるようになりました。競技者の実力発揮を支えるためには、理論的知見を現場に即した形で活用する視点が不可欠であり、その必要性が私の研究と実践の方向性を大きく変える契機となりました。

特にスキージャンプとの出会いは、私の研究人生における大きな転機でした。1990年代初頭、当時北星女子短期大学の佐々木敏先生がスキージャンプ競技の科学的分析に取り組みされており、そのご縁から私も選手のメンタ

ルトレーニングや心理的サポートに関わるようになりました。それ以来、30年以上にわたりスキージャンプ選手の心理支援を継続しており、北海道という冬季競技が盛んな地域において、競技特性に根ざした心理支援を行えたことは、現在の研究・実践スタイルの原点となっています。

初期の心理サポートでは心理テストの実施と結果のフィードバックが中心でしたが、それだけでは十分ではないと感じ、次第に「心理テスト」「ミニレクチャー／ワーク」「個別面接」を組み合わせた支援方法へと発展させてきました。研究と実践の相互作用を意識しながら、選手自身が心理的スキルを主体的に活用できることを重視した取り組みです。近年では他領域との協働も進み、より包括的な心理支援の可能性が広がっています。

今後は、今回の受賞を新たな出発点として、地域と競技に根ざした研究活動をさらに深化させるとともに、スポーツ現場に還元できる心理学的知見の創出に引き続き努めてまいりたいと考えております。



「若手研究者賞を受賞して」

吉本 香乃（酪農学園大学大学院）

令和7年度若手研究者賞を受賞することができ、大変光栄に存じます。本研究は2025年度北海道体育学会「研究助成」を受けて実施したものです。選考委員の先生方に心より御礼申し上げます。また、本成果は山口太一先生、柴田啓介先生をはじめとする共同演者の先生方のご指導、ならびに研究室の皆さまや被験者の皆さまの多大なるご協力によって得られたものです。深く感謝申し上げます。

本研究では、「運動30分前以降における糖質溶液の分割摂取が運動誘発性低血糖に及ぼす影響」について検討しました。これまでの私たちの研究室の運動誘発性低血糖の研究では、特定のタイミングに糖質溶液を2分以内で一気に摂取してもらっていました。しかし、実際のスポーツ現場では飲料を少量ずつ分けて摂取することが一般的です。そこで本研究では、糖質溶液を運動30分前の一気に摂取する従来の方法に加え、30分前以降に2回あ

るいは5回に分けて摂取する方法を設定し、血糖値変動を比較しました。その結果、いずれの摂取方法でも運動誘発性低血糖が生じましたが、5回に分割して摂取した場合の低血糖の程度は1回や2回に比べて抑えられました。つまり、同じ量の糖質飲料であっても少量ずつ分割して摂取することで、運動中の血糖値低下の程度を抑えられる可能性があります。

私たちの研究室ではこれまで多くの先輩方が運動誘発性低血糖に関する研究を遂行し、さまざまな知見を積み重ねられてきました。しかし、依然として「運動誘発性低血糖」という概念がスポーツ現場に広く浸透しているとは言えず、現場に広く知ってもらい、予防するためにはさらなるデータの蓄積が必要です。今後もスポーツ現場で役立つ実践的な知見を提供できるよう、研究に励んでまいります。引き続きご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

研究委員会活動報告

研究委員長 瀧澤 一騎（一般社団法人 身体開発研究機構）

研究委員会の活動としては、例年通り「研究助成の選考と採択」、「学会大会時における若手研究者賞の選考」、を行い、さらに今年度は「学会賞の選考と授与」を行いました。

研究助成に関しては、吉本香乃さん（酪農学園大学大学院）と山本悟さん（北海道教育大学釧路校）が採択されました。今年度は、申請件数が3件と少しばかり寂しい状況でした。出された申請書の内容は甲乙つけがたいものではありませんでしたが、もう少し申請件数が増えてほしいな、という感想を持っております。北海道内における体育学研究のレベルを上げるためにも、申請して頂けることを願っております。

若手研究者賞については、16件の対象発表が申し込まれました。取り下げや筆頭著者が発表できなくなった演題もありましたが、それでもコロナ時期を考えるとかなりの盛況ぶりと言えます。今年度の若手研究者賞は、酪農学園大学大学院の吉本香乃さんが受賞しました。研究

助成とあわせて2冠です。審査は、抄録のきばえから発表の学術性や科学性、発表の分かりやすさ、質疑への対応など、全面的に評価しております。また、今回の審査はGoogle Formsを利用して行うことで、かなりスムーズにできたと感じております。それでも、審査をお願いした先生方にはご負担をおかけ致しました。この場を借りて御礼を申し上げます。

学会賞については、蓑内豊先生（北星学園大学）が受賞されました。蓑内先生は、北星学園大学着任後から心理学に関する論文や著書を多数執筆され、学会賞の受賞に至りました。学会賞の選考には、北海道体育学研究への論文掲載が評価の対象になります。研究助成採択課題や若手研究者賞受賞課題を積極的に北海道体育学研究に投稿して頂き、その積み重ねで学会賞受賞に至る、そういう道筋を研究委員会では描ければいいな、と考えております。

編集委員会活動報告

編集委員長 中島 寿宏（北海道教育大学札幌校）

本年度も『北海道体育学研究』を刊行し、第60巻を皆さまにお届けできましたことをご報告申し上げます。本巻は、第64回学会大会が北翔大学において開催された折に、多くの会員諸氏へ直接手渡しする機会にも恵まれました。掲載された5編の原著論文および研究ノートは、北海道における体育・スポーツ科学研究の蓄積を基盤としつつ、新たな研究課題や視点を提示する意義深い成果です。本誌を通じて最新の知見に触れていただき、今後の研究や教育実践に活用いただければ幸いです。

編集に際し、ご投稿くださった著者の皆さま、精確で丁寧な査読をご担当くださった先生方、そして編集委員各位には多大なご協力を賜りました。加えて、本年度も制作面において北海道リハビリの山本様より多くのご支援を頂戴いたしました。ここに深く感謝申し上げます。

2024年度より編集委員長を拝命し、今回が2度目の編集業務となりましたが、未だ至らぬ点も多く、ご迷惑を

おかけした場面もあったかと存じます。そのような状況の中でも、温かいご助言とご支援に支えられ、編集体制として一歩ずつ前進することができました。この一年間のご厚情に、改めて御礼申し上げます。

次号の第61巻は、2026年3月末を投稿締切として原稿を募集しております。すでに査読が進行中の稿件もございますが、引き続き多様な視点からのご投稿をお待ちしております。また、査読者の先生方には、学術誌としての質向上に向けた継続的なご協力をお願い申し上げます。

『北海道体育学研究』が、今後も北海道の体育・スポーツ科学研究の発展に寄与し、研究交流の中核として機能し続けることを願い、編集委員会一同、より一層の充実を図ってまいります。今後とも変わらぬご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

大会委員会活動報告

大会委員長 塚本 未来（東海大学）

日頃より本研究会・学会活動にご参加、ご協力いただきありがとうございます。今年度の活動についてご報告いたします。

第4回研究発表会（2025）は、5月24日（土）に北海道教育大学札幌駅前サテライトにて開催し、一般研究発表4題、研究助成採択者による研究計画発表2件、参加者34名で実施しました。限られた時間ながら質疑応答は大変活発で、終了後も意見交換が続き、参加者同士の交流が深まる有意義な会となりました。

第64回北海道体育学会大会は、11月29日（土）・30日（日）に北翔大学にて開催され、発表演題は30題となりました。若手研究者による発表15題、一般会員による発表15題（口頭8題、ポスター7題）と、内容・分野ともに幅広い大会となりました。1日目は若手研究発表・ポスター発表・一般口頭発表・学会賞受賞講演、情報交換会、2日目は一般口頭発表とシンポジウムが行われ、充実した2日間となりました。会場ではフロアからの質

問が相次ぎ、座長が質問する時間がほとんど取れないほど議論が活発に行われました。初めて参加された方や遠方からの参加者も多く、活発な議論とあわせて会場は終始あたたかい雰囲気にも包まれた大会となりました。参加者は100名にのぼり、コロナ禍以降、参加者数や演題数の伸び悩みが続いていましたが、本大会では回復の兆しが見られ、学会全体の盛り上がりが見て取れたことを感じられる機会となりました。今後も、皆様にとって参加しやすく、発表しやすい環境づくりを進めてまいります。開催にあたり、実行委員長の小田史郎先生をはじめ北翔大学の皆様、準備・運営に携わってくださった関係者の皆様、そして学生スタッフの皆様に心より感謝申し上げます。

次年度の第5回研究発表会（2026）は5月中旬に札幌駅近郊にて、第65回学会大会は11月に札幌国際大学（札幌市）で開催予定です。ぜひ引き続き多くの皆様のご参加をお待ちしております。

広報委員会活動報告

広報委員長 木本 理可（藤女子大学）

広報委員会では、「ニュースレターの発行」と「学会ホームページの運営」を主な活動として行っております。学会では一番小さい2名体制の委員会ですが、酪農学園大学山口先生に支えていただきながら、今年度も無事に活動することができました。この場を借りて深く感謝申し上げます。

「ニュースレター」は、学会大会の内容や雰囲気を、参加できなかった先生方にもお届けすることを中心に編集しておりますが、本号「No.17」の執筆依頼に関しても、皆さまに快くお引き受けいただきました。どの原稿も大会当日の熱気や本学会の温かい雰囲気の伝わるたいへん興味深い内容になっておりますので、ぜひ多くの方にお読みいただき、今後の大会参加や論文投稿などの契機につながることを願っております。また、好評連載中の「HOP☆ESSAY」では、近況報告や研究紹介などを通して、会員の先生をご紹介する内容となっております。今回は、柴田啓介先生に現在滞在中の「国外留学」に

関するエッセイをご執筆いただき、異文化の中での研究生活など、刺激に満ちた内容は必読です。なお、来年度以降のエッセイ執筆につきましても、「我こそは」という自薦はもちろん、「あの先生の話が読みたい」などの他薦も大歓迎ですので、ぜひ広報委員までご連絡ください。

また、ホームページの運営については、事務局にご協力いただきながら、学会大会や機関誌の情報、役員会議事録などを掲載し、情報発信を行っております。ただ、現在の形でのホームページの運用を開始してから既に10年以上が経過し、情報の探しやすさやスマートフォン等での閲覧性などに課題を感じ、改修の必要性も感じております。より使いやすく、魅力的な情報発信の場となるよう、リニューアルも視野に入れて、よりよい運営を目指していきたいと考えておりますので、ぜひ会員の皆さまからも忌憚のないご意見をお寄せいただければ幸いです。

事務局より

学会事務局 畝中 智志（北翔大学）

今年度も北海道体育学会の事務局を担当させていただいております。事務局をお引き受けして2年目となり、学会運営の一端を担う立場として、その責任の重さとともに、本学会が北海道における体育・スポーツ・健康科学分野の研究交流の基盤となっていることを改めて実感しております。会員の皆様の日頃のご理解とご協力に心より感謝申し上げます。

学会活動は、研究成果の発表や議論の場であると同時に、世代や専門領域を越えたネットワーク形成の機会でもあります。臨時総会、研究発表会、学会大会などの活動を通じて、交流を深めていただきたいと思います。事務局として、円滑な運営と情報発信の充実に努め、会員の皆様が参加しやすく、活発に交流できる環境づくり

を支えてまいります。

さて、本年8/31～9/2には、第75回日本体育スポーツ・健康学会大会が北翔大学にて開催されます。全国規模の学会大会を北海道でお迎えすることは大きな意義を持ちます。本大会が実り多い研究交流の場となるよう、関係各位と連携しながら準備を進めているところです。北海道体育学会としても、この機会を契機に地域と全国をつなぐ学術的発信を一層強化していきたいと考えております。

今後とも本学会の活動への積極的なご参加とご支援を賜りますよう、何卒よろしくごお願い申し上げます。

「エディスコワン大学への留学」

柴田 啓介（酪農学園大学）

2025年6月からオーストラリアのパースにあるエディスコワン大学（ECU）に留学に来ております。受け入れ教員はエキセントリック運動の研究で世界的に著名な野坂和則先生です。野坂先生とは、私が大学院生であった2014年に瀧澤一騎先生（現・身体開発研究機構）に連れて行って頂いたマレーシアの学会で出会いました。そして、2015年に3週間 ECU を訪問させて頂いたのをきっかけに研究テーマをエキセントリック運動による筋力トレーニングにすることを決め、現在まで研究指導して頂いております。酪農学園大学では保健体育の専任教員が2名（山口太一先生と私）だけなので、私の不在期間に山口先生に相当なご負担を強いることになるという葛藤もありましたが、研究者としての成長には必要な経験だと考え、学内の国外留学制度に応募させて頂きました。

こちらでは、実験参加と論文執筆を中心とした日々を過ごしています。被験者基準を満たす実験には全て参加する方針で、知り合った研究員や大学院生に声をかけ、これまで実験6つと予備実験1つに参加しました。運動時の筋長に着目した研究、運動前後の中枢性疲労を評価する研究、エキセントリック局面に高負荷をかけるトレーニング手法に関する研究、挙上速度を基準に反復回数

を決めるトレーニングに関する研究など、どれも興味深いものばかりでした。論文執筆は思うように進まず苦戦することも多いですが、滞在中に投稿した論文のうちひとまず1本が受理されたので少し安堵しております。

3月末に帰国予定ですが、大切なのはECUでの経験を今後にどのようにつなげていくかだと思います。ありきたりですが、まずは地道に研究を積み重ねたいと思います。そして、研究者としての地位を確立させ、将来的には留学を受け入れる側として国際的な研究交流に貢献したいです。



★★

編集後記

2年目の広報委員会の活動もあっという間に終わろうとしています。と申し上げても昨年度同様、木本先生からベストタイミングでメールが届き、私は完成した資料に目を通させていただきただけですが。木本先生、ホームページの更新、広告フライヤーの作成、ニュースレターの原稿依頼、何から何までありがとうございます。私が唯一できているのは、昨年度同様、研究会や学会大会での写真撮影のみでした。

R7年度の本学会の主な事業は、第4回研究発表会、北翔大学で開催された第64回学会大会、学会誌第60巻の発刊などでした。学会大会は参加者が100名となり、大変盛会となりました。その様子については本誌をご覧ください。R8年度も同様に研究発表会、札幌国際大学で開催される学会大会がごございます。しっかりと広報を行い、盛り上げてまいります。また、本学会の事業ではございませんが、多くの方からのご案内の通り、R8年8月31日（月）から9月2日（水）に北翔大学を会場に第76回日本体育・スポーツ・健康学会大会が開催されます。本学会員のみならず奮ってご参加いただき、お知り合いの方を本学会へ勧誘しましょう。最後に、本誌の原稿を執筆いただいた皆さまに心より感謝申し上げます。次回の学会大会でも次号の原稿依頼をいたしますので、ご快諾くださいますようお願いいたします。

広報委員 山口 太一

★★

是非こちらもお覧下さい。北海道体育学会公式ホームページ <http://hspehss.jp/>
北海道体育学会ニュースレターNo.17 令和8年2月27日発行